



工業系生徒の情熱に点火



ドイツの訓練生と交流する生徒たち。ドイツ・ウオルフスブルク市で。(名古屋市教育委員会提供)

ドイツでモノづくり研修

名古屋市教委

モノづくりのスペシャリストを目指す名古屋市の生徒たちが、職業教育が盛んなドイツを訪れ、学校で学びながら企業で訓練生として技術を磨く同世代と一緒に実習に取り組んだ。技術力の高さや学び方の違いに「負けていけない」と心機一転、「海外で通用する技術者になりたい」と夢を燃やさせている。(川台選手)

グローバル社会の中、技術者を目指す高校生にも国際的な感覚を身に付けてもらうことが、名古屋市教育委員会が本年度初めて実施。八月十八日から十一日間、工業系の学科がある市立工業高校（岡市東区）と工業高校（岡市中央区）の生徒二十人が、ドイツ北西部にある「デーグラーサクセン州のウオルフスブルク市やハノーバー市などを訪れた。

プログラムのメインは、世界大手の自動車メーカー「フォルクスワーゲン（VW）社」と、建設用の機械や車両などを製造する「コマツ・ハノマーク社」での研修だ。古くから職業教育が社会に根付

くドイツでは、技術者を指す場合、日本の高校にあたる職業学校で勉強しながら週に数日、企業で訓練生として技術を磨く「デュアルシステム」で学ぶのが一般的。高校生たちは、それぞれの企業で研修中の同世代の訓練生たちと一緒に、電気配線や前後などの実習に取り組んだ。

そこで見たのは、「電子機械科の寺嶋敬吾君（工業高二年）は、VW社の訓練生が、材料を削りながら削って加工する旋盤の作業で、指示通りの形に百分の一、単位で仕上げている様子に目を見張った。

同世代の訓練生と交流「世界に通用する技術者に」

「同世代でも、自分たちよりレベルの高いことを当たり前のようにならやっていると驚きのだった」と振り返る。機械科で学ぶ岩城諒は徳君（工業高二年）が感心したのは、材料に穴を開けるボール盤という機械を使う技術だ。プラスチックに穴を開ける作業に挑戦すると、目標とする直径より大きくなってしまふのに対し、コマツ社の訓練生は次々と精度の高い穴を開けてみせた。「二、三でも違えば安全にも関わらず作業、プロの職人から教わっているの聞き、技術が若い人に受け継がれているんだと感じた」

訓練生たちが通う学校も訪れ、授業に参加。日本との学び方の違いに、建築システム科の伊藤達也君（工業高二年）は「学習に対する姿勢を考えると直さなければいけないと思う」と話す。技術系の授業では「教師は、発注者で、生徒たちが細かい方法や手順を考案、あらゆるものをランカーネット（Creative Thinking）など最先端の技術を活用した自主製作もあり、「みんな向上心があつて、学びを楽しんでいるように感じた。作品の完成度も高く、負けていけないと思つた」。

ドイツの制度に違い、名古屋市教委では本年度から「デュアルシステム」を市立高校に導入している。週一日、地元企業で学業と技術科の祖父江孝人君（工業高二年）は、ドイツの同世代との交流などを体験し「これまで考えもしなかつたような大きな目標ができた。今まで以上に学校や企業で積極的に学び、将来は世界で通用する技術者になりたい」と力強く語った。

中野新助 ナブラス
教育関係の記事をまとめた読みがきます。

全日制や定時制に通う高校生の中で、工業や商業といった専門学科で学ぶ生徒の割合は、一九六〇年代に40%を占めていたものの現在は18%と半減している。昔懐かしい高学歴化や少子化により、普通科と比べて専門学科が再編対象になりやすいことなどがあ

企業実習を一層重視

専門学科は、モノづくりなどの実習を通して専門的な知識を身に付けることが重要だ。文部科学省が二〇一四年度に「日本版デュアルシステム」のモデル校に指定した森

名工業高校（三重県桑名市）